

## Thomas S. Stroik: *Locality in Minimalist Syntax*

Cambridge, Massachusetts: MIT Press, 2009. x + 149pp.

---

### 中川直志

---

概念的必然性に基づいて最低限要求される仮説のみを用いて、人間言語の最適なデザインを定義しようとする極小主義において、生成文法を特徴づけてきた概念の一つである「移動」は、その存在意義が改めて問い直されている。本書は移動やそれに付随する経済性の原理の存在を否定した上で、それに代わる概念（“Remerge（再併合）”や“SURVIVE”）を提案し、真に局所的な操作のみからなる文の派生を実現しようとする試みである。

本書は、結論である4章を除き、本書の提案について概念的側面と経験的側面から説明した1章と2章、そして、本書の提案によって説明できると主張するさらなる現象について取り上げた3章に分けられる。紙幅の都合上、1章と2章をまとめて次節で概観し、3章については2節で概観する。3節においては、本書が掲げた目標に照らし、本書の理論に対する貢献について考察する。

#### 1. 理論的枠組み

極小主義においては、統語派生の最終出力であるインターフェイス表示のみが認知システムによる解釈の対象となる。最終出力表示のみが可視的なのであれば、表示を生み出す派生や、派生に関わるあらゆる操作はインターフェイスにおける概念的必然性を失うことになる。ところが、移動はその入力としての表示と、出力としての表示を必要とするので、移動を含む派生理論は必然的に多重表示的となる。さらに、移動操作を制限するために必要となる（最小性条件等の）経済性条件も、表示にアクセスせざるを得ない。

ならば、派生という概念そのものを捨て去っていいのかというと、そうではない。表示しか持たない統語理論においては、表示を解釈したり排除したりするための処理上の要求が天文学的に大きなものとなる。著者はFrampton and Gutmann (2002) の考えを取り入れ、派生が、“Crash-Proof” でなければならぬと主張する。つまり、派生操作は不適格な表示を一切生成してはならないのであり、そのような理論では、派生が途中で破綻することがなく、不適格な表示を排除するシステムも一切必要なくなると考える。

上記に基づき、著者は、全ての統語特性、とりわけDisplacement (転移) 特性を説明でき、かつ、統語論における様々な要求を充足できる、極小主義の唯一の理論は厳密に局所的な統語操作を用いる理論に他ならないと主張する。つまり、転移は“Repel-based”な操作に由来すると定義する。ある構成素Xが主要部Yによって照合される素性を持つ時、もしXの内部にYと適合せず従ってYによって照合できない素性があるならば、これらの素性は照合操作から生き残り (SURVIVE)、さらなる素性照合のため次のC統御主要部Zまではじかれることになる。具体例を見よう。

- (1) a. Sam wants  $[_{TP1} \text{Chris to}_1 \text{ be believed } [_{TP2} (\text{Chris}) \text{ to}_2 \text{ wealthy}]]$   
 b. Chris was expected  $[_{TP1} (\text{Chris}) \text{ to}_1 \text{ appear } [_{TP2} (\text{Chris}) \text{ to}_2 \text{ be happy}]]$

(Stroik (2009: 15))

(1a, b) において、ChrisがSpec, TP2に入ると、その素性は主要部T ( $to_2$ ) によって照合される。しかしながら、Chrisはその不定詞主要部とは適合しない素性—例えば格素性—も持つ。従って、派生の中で不適格な素性はSURVIVEし、主要部TをしてChrisをはじかせる。Chrisはその素性を照合させるために、構造上次に高い主要部 ( $to_1$ ) へと移動させられる。もし先の照合操作をSURVIVEした全ての素性が今回の主要部によって適切に照合されるならば、その主要部からはじかれることはなくなる ((1a))。一方で、主要部が残っている未照合素性を全て照合しないのであれば、Chrisは再度はじかれ、全ての照合すべき素性を照合し終えるまではじかれ続けることになる ((1b))。Repelという操作は厳密に局所的操作であるので、転移は、常に、次に上位にある投射に限定される。結果として、Repel分析は、牽引や移動を制限するために必

要とされる経済性条件を一切必要としない。

ただし, Repelも移動には違いなく, (派生過程の) 表示に全く依存しない訳ではない。そこで著者は, Chomsky (1995) のNumeration (N) に自らのアイデアを加えて導入する。Nから語彙項目が併合される時, それはNからのコピーであり, コピーされた語彙項目はNに残っているというのである。併合が適用された際に照合される語彙項目 (LI) の素性はいずれも, 派生とNの両方で照合される。もしLIの素性の全てが照合されると, NにおいてもLIの素性の全てが照合されることになる。この段階でLIは不活性となり, これ以上の統語操作に関与できない。一方, もしLIの何らかの素性が統語操作を通じて照合されなければ, その素性はSURVIVEし, Nにおいても照合されないまま残る。このような素性を含むLIは派生の中で再併合できるが, 派生が終了した段階でNのLIが照合されないままの素性を持っていた場合, その派生は破綻する。“Chris was fired.”という受動文の派生を例に, 具体的に見よう。

(2) Merge ⟨fired, Chris⟩ → fired Chris (ibid.: 15)

(2)において, Chrisは少なくとも格素性と主題役素性を持つ。受動化された動詞は主題役素性を照合できるが, 格の照合はできない。Chrisの格素性はNにSURVIVEすることになる。次に利用可能な主要部wasが併合されても, wasは格照合子ではないので, Chrisは未照合の格素性を持ち続け, Nでも生き残る。最終的に, Chrisは, (3)に示すように, その次に利用可能な主要部Tが併合された段階で再び再併合することになる。

(3) Rmerge ⟨Chris, ⟨T, ⟨Chris, ⟨was, ⟨fired, Chris⟩⟩⟩⟩⟩ → Chris T Chris  
was fired Chris (ibid.: 18)

(3)において, 主要部TはChrisの未照合の素性を全て照合することができるので, Chrisはその後, 派生に再併合されることはできなくなる。

“Repel”という一種の「移動」を最終的に“SURVIVE”と「再併合」という概念に置換することにより, 転移を(移動前後の)表示を見ることなく説明できると著者は主張する。

## 2. 不適格な派生の排除

本書の提案が直ちに直面する課題は、「(最小性条件等の経済性条件が行ってきた) 不適格な派生の排除」である。この課題に向き合う3章において、一貫して用いられる重要なアイデアは、筆者に言わせれば、「不適合ではないが、照合はできない主要部が存在する」ということである。主要部はそれと不適合でないDPがその投射から抜き出されるのを阻止するが、照合するかは別の話で、照合できなければ、派生は破綻する。具体例を見よう。

(4) who read what (ibid.: 72)

(4)のような多重wh構文(元位置のwh句が指示的で、主節のwh句とペアリストの読みを持つ場合に限る)において、元位置のwh要素は、それが解釈を依存する先行詞要素(主節のwh句)によって直接C統御され、先行詞の関連素性を照合する主要部(主節のC)によって、その依存素性を不活性化されるものと仮定する。(4)における元位置のwhatは再併合を繰り返し、(5)の最上位の位置で全ての素性の照合を終えることになる。(5)において、音声内容を有するwhatが再併合しているように見えるが、実際には音声内容を含まない素性であることに注意。)

(5) [who [what [C [who [what [T [who [what [v [read what]]]]]]]]]] (ibid.: 72)

それでは、(6)に示された相違はいかに説明できるであろうか。

(6) a. Who took a picture of whom

b. \*Who took the picture of whom (ibid.: 74)

(6)は、aが主要部となっているDPからwhomを抜き出すことは可能だが、bが主要部となっているDPから抜き出すことはできないことを示している。(6a)において、Dは指示的ではないのでwhomの[REF]素性とは不適合であり、その結果、whomはDPをSURVIVEし、主節CPに再併合できる。一方、(6b)のDは指示的であるのでwhomの[REF]素性と不適合ではなく、その結果、whomは不活性化されDPをSURVIVEできない。従ってwhomの[REF]素性はC[WH, REF]主要部によって照合されることが不可能となり、派生は破綻する。

重要なのは、D主要部がwhomと「不適合ではないものの、それを照合はできない」というアイデアであり、様々な非文法的wh構文を排除するために決定的な役割を果たす。

### 3. 評価と展望

主張が強力なだけに様々な指摘ができそうだが、ここは本書の目的に照らし、「経済性の原理の排除」と「真に局所的な操作のみからなる派生」という2点から若干考察したい。

まず前者について。経済性の原理が担ってきた負担は、「不適合ではないが、照合はできない主要部」に移管された。その本質は照合の複雑化である。例えば、(6b)においては、D主要部が、元位置のwh句が持つ、先行詞に依存してペアリストの解釈を持つという、[REF/WH]素性を（少なくとも適切に）照合できない（照合できていれば、DP内に派生を破綻させるような素性はなくなる。）がゆえに、[REF/WH]素性がDP内に残り派生を破綻させるのであるが、話をここに限れば、元位置のwh句は、照合されない以上、DPからSURVIVEできるはずである。これでは困るので、「D主要部と元位置のwh句が不適合ではないため、D主要部が元位置のwh句を（照合できないにも関わらず）不活性化する」というアイデアが必要になってくる。つまり、「(不)適合」と「照合」という概念の使い分けが重要になるのだが、両概念の本質的な区別が明確でないこともあり、後付けの理屈のように思えてしまう。経済性の原理が担ってきた負担は、移管されたのであって、消えた訳ではない。著者の表現に従って「不適合ではない（“nonincompatible”）」という二重否定の表現を用いているが、この表現にも、著者の苦しい胸の内があるように感じるのは筆者だけであろうか。(6b)の非文法性を目の当たりにして、指示的D主要部とwhomが総じて「適合する」とするとは断言しづらいだろう。「適合」と言い切ってしまうと、照合しないのが不自然であるし、逆に「不適合」と言い切ってしまうと、SURVIVEできないのが不自然である。「不適合ではない」というのは絶妙な言い回しではあるが、場当たりの響きを払拭できない。

後者についても完全に成功したとは言い難い。「局所的な操作のみからなる派生」が意図するのは、「派生後の構造も見なければ、派生の先読みもしない」ということであるが、先読みの問題はNumerationを採用している限り、完全な解決はあり得ない。著者は自らが仮定するNumerationが、Chomsky (1995) 等が仮定するような、「派生に先立って派生に必要なLIが全て一度に語彙部門からダウンロードされる」ものではなく、「必要に応じてLIが加えられる」ものであり、ChomskyのNumerationが内包していた「先読み性」とは無縁であると主張するが、各LIがどのような素性を持ってNumerationに加えられるのか決定するメカニズムについては述べていない。派生がどのように展開するかを決定するのはLIではなく、素性である。本書の枠組みにおいても、最終的に何一つSURVIVEしないように素性を用意しなければ、派生は必ず破綻するのであって、Numerationの先読み性があるからこそ“Crash-Proof”な派生である。

ただし、本書の提案を全て排除すべきとするのは早計である。転移に絡む問題の根底には、派生が素性によって駆動されながら、現実に移動するのはLIであるという現状がある。著者は純粋に素性がSURVIVEし再併合する理論を提唱しており、筆者には一理あるように思える。また、極小主義における従来諸仮説に対する批判的考察には、的を射ていると思われるものも少なくない。例えば、大きく論じてはいないが、本書の提案はフェイズに関する議論にも一石を投じる可能性がある。本書の試みが、極小主義の精神の否定ではなく、その、ある意味における進化を目指すものであることは強調しておきたい。

本書には誤植等が少なくない。提示するには紙幅に余る量であり、改善を要望したい。

### 参考文献

- Chomsky, Noam (1995) *The Minimalist Program*, Cambridge, Massachusetts: MIT Press.  
 Frampton, John and Sam Gutmann (2002) “Crash-Proof Syntax,” In Samuel D. Epstein and T. Daniel Seely, eds., *Derivation and Explanation in the Minimalist Program*, 90-105,

Oxford: Blackwell.